

特別上映会(第7回CMS連続セミナー)

日本近代化遺産への旅 荒川放水路物語

日時 平成24年6月16日(土) 15:30～
16:30
場所 千代田区和泉橋区民館 4階洋室C
主催 NPO法人 シビルまちづくりステーション

日本近代化遺産への旅

土木学会映画コンクール第19回最優秀賞

明治以降日本の近代化は急速に進められた。この作品はナレータに檀ふみ氏、ナビゲータにイラストレーターの南伸坊氏を起用し日本の近代化を担った交通・産業・土木分野の「近代化遺産」を映像化している。明治5年新橋―横浜間の鉄道開業の貴重な映像をはじめ、古川清一設計の旧碓氷三号橋梁や餘部鉄橋など当時の技術の粋を結集した鉄道橋梁群、また、田辺朔郎による琵琶湖疏水事業の全容とそれが現在の京都の風景に溶け込んだ美しい映像の数々、さらに各地に残る、景観と調和した近代化遺産としてのダムや港湾、灯台、水門など、一部いまだに現役として機能する施設も含め、丁寧な解説と心に残る映像で紹介している。

現代に引き継がれている技術者たちの、ものを作る喜びと誇り、情熱とロマンが伝わってくる作品である。

「荒川放水路物語」―川がはぐくむ暮らしと文化

土木学会映画コンクール第20回優秀賞

明治43年8月、隅田川流域は未曾有の大洪水に見舞われた。荒川放水路は、隅田川流域を洪水被害から守るために、明治44年に計画され大正2年から昭和5年まで20年間かけて建設された、隅田川岩渚水門から東京湾までの延長22km、川幅500mの人工河川である。荒川放水路は、戦後のキャスリーン台風襲来時にも無事だった。

本作品は、古く隅田川の風景、後に荒川放水路を愛でて散策の地とした永井荷風の日記(断腸亭日乗)により、明治末年から昭和の高度成長期及びその後の安定期までの荒川放水路の建設、及び周辺地域の発展について、名

作映画のシーンを導入しながら紹介している。

引用されている作品は、荒川放水路周辺の出水を描いた昭和13年「綴方教室」(高峰秀子)、荒川放水路の風景を映した昭和30年「渡り鳥いつ帰る」(太刀川洋一、水戸光子)、千住のオバケ煙突のある昭和28年「煙突の見える場所」(芥川比呂志、田中絹代)、鑄物の街川口を扱った昭和37年「キューポラのある街」(吉永小百合)で、ノスタルジアに溢れている。田口トモリヲのナレーションも味わい深い。